

かんきつ干ばつ対策について

1. 今年の気象状況

県内かんきつ産地の降水量は、5～6月は平年比130～300%と多かったが、7月以降は15%と少なく経過している。気象庁の予報からも気温は高く、日照時間は長いことが見込まれ、干ばつ傾向となることが予想される。

かんきつ地帯の降雨データ（5月以降）はカテゴリ別情報の「黒点防除参考資料」に掲載しています。

2. かんきつの干ばつによる症状

干ばつ傾向が続けば、かんきつ樹は葉が巻く、旧葉の落葉、果実肥大停止、などの症状が出始める。対策を取るためにも、干ばつによる症状について知っておく必要がある。

表1 温州みかんの干害進行状況の目安（栗山）

干ばつ後日数	干害の徴候
20～30	葉が巻き始める
20～40	果実が柔らかくなり、肥大が停止する
30～40	旧葉が落ち始める
40～50	葉全体の緑色があせ、変色し始める
50～60	葉が昼夜とも巻くようになり、旧葉がほとんど落ちる
50～60	葉肉崩壊症が現れ始める
70～80	果実がミイラ状になる
70～90	果皮がデコボコになった果実が現れ始める

3. 干ばつ対策

（1）早期かん水の実施

本年は6月末に相当量の降雨があったことから、ある程度の水源は確保されているものと思われます。これらを有効活用するため、次の点に留意する。

- ①極端に乾燥する前に早期にかん水を始める
- ②デコポン・はるみは葉からの蒸散量が多く、土壌が乾燥すると根群が枯死しやすいため、特に早めからかん水を始める。スプリンクラーの場合は1回20mm程度とし、7～10日間隔にかん水することが望ましい。

灌注器を用いる場合は成木1樹当たり1カ所10ℓで5カ所程度を目安とする。

- ③ その他、空缶（一斗缶等）に小穴を開けて点滴かん水、肥料袋を枝に括りつけ、小穴を開けて点滴かん水するなど工夫する。

(2) 地面蒸発・地温上昇防止

かん水後はシートマルチなどを被覆して地面からの水分蒸発、地温上昇を防ぐ。

(3) 摘果

①みかん

荒もぎ摘果を早期に実施し、着果量が多い樹は8月上旬までに終わらせる。

表2 摘果・かん水と階級割合 (%)

調査園	2L	L	M	S	2S	3S
摘果とかん水をした園	20	46	30	4		
摘果をしないでかん水した園	2	5	40	45	7	1
摘果をしてかん水しない園				19	64	17
摘果もかん水もしない園				1	24	85

(昭和42年 豊町大長津倉地区 大崎農業改良普及所調査)

②中晩柑

早期に摘果を行う。デコポン・はるみはすでに荒もぎ摘果を終えていると思われるが、まだの園地は早急に行う。

(4) 病虫害防除

干ばつ時にはミカンハダニ、サビダニが多発しやすいので、早期防除を徹底する。

(5) 除草

雑草との水分競合を防ぐため、除草を徹底する。

(6) その他

かん水用に確保できる水量、労力によっては葉水も有効であるという報告があるので実施を検討する。

また、海に近い場所の地下水は海水の混入によりECが高くなることがあるので事前に測定する必要がある。

表3 葉水およびかん水による吸水寄与度 (佐賀果試)

処理区	直後	翌朝
葉水	0.72%	0.34%
かん水1 $\frac{1}{2}$ ℓ	—	0.03%
かん水4 $\frac{1}{2}$ ℓ	—	0.13%

注) 吸水寄与度: 葉の全体の水分に占めるラベルされた水分(重水)の占める%